

た。

十月になるとさらに訓練は厳しくなった。体が耐えられるまで鍛えるとはこのことであろう。公主嶺神社までの駆け足行軍があった。ちよつとでも歩いたらドヤされる。駆け足である。なかには倒れる者もあった。が、それに寄りつくわけにはいかない。倒れっぱなしで、あとは隊付きの者が手当をしたであろう。振り向くことができない。もう自分の駆け足で精いっぱいだから。こうした訓練が終わった夜半は必ずといていくらい非常呼集がかかる。

戦地の交代要員はこうして練成された。苦しい鍛錬の毎日を振り返ることもなく十月末日を以て戦車学校の籍は抜けた。いわゆる卒業であった。こうして前線への交代要員は育成された。いつ前線にと命ぜられても覚悟はできていた。それなりに教育もされていたのでなんら苦にすることもなかった。

ただ老いた両親を面倒見る兄弟がなかったことが気がかりだったといえはそれだけである。北支か南方への転出を今にも来るかと待ちかまえていたが、盛岡へ

転属ということになった。「西軍参勤第一〇五六号に依り戦車第二十二連隊に転属を命ず」という記録が残された。

ソ満国境、シベリア抑留で得た

一人は万人のため

万人は一人のため

愛媛県 安井 俊 夫

私は大正十二年一月二十六日、愛媛県旧温泉郡久米村窪田という所で生まれ、長男で、姉一人弟三人の家庭であった。父は役場へ勤めるかたわら農業に従事していた。私は昭和十六年三月、松山商業を卒業すると、三月二十四日には満州の撫順軽金属へ入社した。

当時、頁岩げいがんからアルミニウムをとるということで、鮎川義介社長の満州重工業の傘下にあったこの軽金属会社（世良正一社長）の経理部の出納係をしていた。主に満人の従業員給料計算である。金は満州国の金

と日本の貨幣を作っていたが、私の日給は二円で手当がついていた。当時内地の県庁の勤務は二十円以下と言われていた。私の手取りは六十六円である。その後半年で月給となり、在満手当が八〇パーセントとなったのであるから、九十円で、内地勤務者の三倍にもなった。

宿舎は兵舎寮に入り、その後兵隊に行った人は鉄筋コンクリート建ての望花寮に入った。全国から三十人くらい入社し勤務をすることとなった。修学旅行以外初めての旅行で、門司集合、「ウラル丸」で大連へ、鉄道で二〇三高地、東鶏冠山等の日露戦争の戦跡を見た。

乗船する時、父から「いよいよ渡満する時、益々意を強くし職域奉公の誠を尽くせ」と電報があり、この文を今でも覚えている。この電報を、人事課の長谷川さんが私にくれた。他の仲間には電報は米なかった。

私は松山商業でラグビーをやっていたが、軽金属にはラグビー部があり奉天、新京などへ試合に行った。満州飛行機等とも試合をしていた。現地入営すること

になり、撫順公会堂で兵隊検査し、「甲種合格」と徴兵官の将校から言われ、婦人会の見ている前だったので面目を施し、内心嬉しかった。私等は最後の現地入営兵となるので、その間一カ月、内地の家に帰り親孝行をしていた。

入隊した部隊は、満州第七国境守備隊だったが、外出は引率外出が一度あつたきりである。満州の寒さは大変なもので、特に南国育ちの私にとっては訓練の厳しさに輪をかけたものであつた。初年兵の耐寒訓練では、手を外へ出し、その後手に手を摩擦して部屋に入る。長い時間行軍すると汗が出るが、そのまま休むと凍傷となる。戦後、シベリア抑留中耐寒訓練をしなかった人は凍傷になってしまった。私は先にも申した如く、戦前、学生時代からラグビーで鍛えていたので、凍傷にもならず助かつたのである。

初年兵三カ月目に幹部候補生に合格し、別の教育隊で四カ月の訓練があり、つぎに甲・乙種の試験があつた。甲幹は二人、他は乙種で、甲種は甲種だけで訓練し学校へ行く。軍曹に任官し、昭和二十年一月遼陽の

予備士官学校、別名光華部隊Ⅱ満州第四一五部隊に入隊。予備士官学校から一般の歩兵は内地へ帰ったので、戦後その人達で「光華」という記念誌を刊行した。

私は重機関銃の出身であり、満州での訓練では、国境守備隊で古参兵が陣地構築をしたのを見たが、二重、三重の壕があり、そこで、敵状（ソ連軍）を毎日監視している。ある時、中隊長が「下へ降りて、薬罐で水を汲んで来い」と言われた。前にはソ連兵がいる所、水はやっと汲んだものの、今度は帰る場所が判らず、随分と苦勞して帰ったことがある。これは、中隊長が私を試したのであろう。

私は、軍隊へ入る前、撫順の会社にいる時、軍隊経験のある一年志願の将校である先輩から、機関銃の名称や部品の名を教わったり、分解、組立てまでも教わり覚えていたし、軍隊では大きな声を出すことが大事だ、とも教わっていたので、中隊長は、私が幹部候補生になるので注目してしてくれたのだらうと思う。隊には、満蒙開拓義勇軍出身の兵隊もいて、その人達は義勇隊の時から国境守備や監視は教育され、体験をし

ておられたようである。

昭和二十年六月十日、予備士官学校を卒業し、見習士官となり北支へ転属を命ぜられ、天津・北京と行った。済南に第四十三軍の司令部があり、申告をしたが、八路軍との戦闘で負傷した七十余人の兵を連れて、八月に北支から内地に帰る衣部隊（第五十九師団）に転属を命ぜられた。

その後、奉天駅で隊員を又銃させていたところ、「各部隊の責任者集まれ」とのことである。「満人の不穏行動あり、警戒せよ」ということである。ところが、新聞などで日本の敗戦を知り「青天の霹靂」、心の隅には「やれやれ」と思いつつも、「これは困った。部隊を連れていかねばならぬ」と、その責任と如何に行動するかということの方が、指揮官として大きな問題であった。

その後、朝鮮に入ったら、日本人の家などが焼かれている。他の部隊から「見習士官これから釜山まで一緒に来い」と言われたが、私は「咸興まで行く任務がある」と断り、元山から咸興へついた。そこに一〇二

カ月いて、咸興で部隊に申告し、兵隊と別れた。兵は銃を取られたが将校の帯刀は許された。

九月か十月頃か、ソ連軍は「これから新潟に帰してやるから船に乗れ」と言う。その船にはソ連の婦人兵が乗るので不思議に思ったが出帆した。しかしそのうちに途中で碇泊している。気持は早く出て新潟に帰りたい、日本海を渡れば新潟なのだから、と思っっているが船は出ない。「船が故障したので修理に長引くから一度ここで降りろ」と命ぜられた。

降りてみると、そこはボセツトという所で、日本の天幕が張ってある。そこへ入れと言う。「周りには地雷が埋めてあり、時々爆発しているのであまり歩くな」という。船に乗る前に将校だけの隊と、将校が連れた隊とに二つに分けられた。

私は、少尉に任官したので部隊長に申告に行った時、部隊長は私を他の将校と交替して、将校団の方に入れてくれた。昭和十九年二月に兵隊となり昭和二十年八月に少尉に任官となるのだから、当時将校が足りなかつたので早い任官となつたのではないかと思つていた。

我々は「内地に還す、新潟へ上陸させる」とソ連軍に騙され、「船が故障だから、一時下船」とさらに騙され、シベリアへ連れて行かれることになってしまった。戦勝国として、日本軍をソ連の復興に使う、国際法の「ハーグ条約」に堂々と違反したのである。戦勝国、特にソ連にとっては、敗戦国軍人を強制労働させるのは当然と、非人道的な行動がこれから五、六十万人の日本軍人に抑留という形で行われるのであった。

昭和二十年十一月、ボセツトからエラブカへ抑留のため昼間に乗車、汽車は夜動いた。汽車での移動は一月くらいかかったと思う。欧亜の境、ウラル山脈を越えて、キンネールという所で降り、そこからエラブカの収容所まで歩く。このエラブカは帝政ロシア時代の修道院であつたという。それからの抑留生活は、特に寒冷地での経験の無い者は凍傷にかかり、どうにか順応するようになったのは昭和二十一年二月頃であつたろう。

この収容所のほとんどは将校で、他は高級将校の当番であつたが、この耐寒団員も他のシベリア抑留者

と同様の苦勞を強いられていた。衣服やフェルトの靴はソ連軍から支給されたが、タバコは、マホルカというのを吸うことができた。しかし、その巻紙はプラウダとか、イズベスチア等の新聞紙であったので、今の巻タバコから比べれば雲泥の差であった。当時のソ連は紙も不足していたことが、これでも想像できる。

ソ連の子供達は幼稚園式の学校へ通っていた。学校では給食というか、パンを子供達に支給する。コルホーズの畑仕事をする時、民間の個人から、薯を畑に埋めておけと言われた。我々が畑仕事を終え収容所に帰った後、民間人がそれを掘り出して食べていたようである。

ソ連兵の教育程度は低かったようで、計算はほとんどできない。まして割算、掛算などはできないから、答は足算で出すのである。そのため随分と時間がかかる。間違えれば、また一からやり直すのだから我々の常識からは考えられなかった。

収容所や作業場付近には若い男はほとんどおらず、老人や女性だけだった。若者は欧州の独ソ戦などで死

んだり負傷したりしてしまつたらしい。陸軍士官学校出身の若い将校で、ロシア語が話せる者がいて、ソ連のことは良く知っていた。しかし、特務機関に勤務した将校は皆、ソ連軍に連れていかれ拘禁されていたようである。

勞働で空腹になりながらも仕事に行き、帰ってから食べようと思つて残しておいた食物を、誰かが知らぬうちに食べてしまう。などということも、将校グループの中でもあった。その反対に、階級が上の将校は仕事に行かず残っているの、帰つて来た若い将校に自分に配給されたパンを分けてやる人もいた。

衣食足りて礼節を知るといふが、衣食足らずとも礼節を知る者と、文字通り衣食足らずして礼節を守らぬ者、留守中に他人の黒パン（一日三〇〇グラム）を食べてしまった将校もいて、環境がその人々の生き方を變えてしまうのも、この抑留生活中に学んだような気がする。

自分はマラリアにかかり、高熱・悪寒の連続のため点呼にも出られぬようになり入院をすることになった。

若い「キニーネ」を続けて飲めと言われた。黄色いあの薬を続けて飲まぬと、内地へ帰ってから再発すると軍医が言ったので、お陰で帰ってからマラリアは再発しなかった。

昭和二十二年十一月十八日、北海道の函館港に着いた。復員した仲間は将校が多かった。仲の良かった奈良原の屋根谷義光氏は、戦没者のために靖国神社で慰霊祭を挙行してくれている。私は、妻の体が悪いのであまり出席していないが、卒業後、内地勤務となった予備士官学校の連中は生きている者が多いが、北樺太の者と、満州の原隊へ帰った人には戦没者が多い。

それに引き代え、私は北支の司令部へ行ったので助かって今も生きている。私は生きて還ったので、人のためにしなければならぬが、妻の手がはなせぬので、シベリア墓参にも満州にも行ってない。

昭和二十三年一月、農業会に入り、それが三月、協同組合となり、四十年には松山市の農協に入った。そこで良かったと思うのは「相互扶助の精神の実践」である。シベリアから函館港に着き、内地へ帰る。汽車

の中で「二宮尊徳の報徳の精神」を軍隊、シベリア抑留を通じ、得たものである。「一人は万人のため、万人は一人のために」農協ビルの玄関に碑が建てられている。私は、農協勤務中、その碑文を常に見ながら、心を感じながら、戦後の生活を送っていたのである。

酷寒の満州で、ソ連陣地と相對しての勤務、予備士官学校での厳しい訓練、教育そしてシベリアの抑留生活。これによって得られた体験を「一人は万人のため、万人は一人のため」の具現化に努力させていただいたことを感謝している。

### 張鼓峯参戦以来

#### 通信隊一筋の軍務

秋田県 小松 武雄

私の軍歴は以下の通りです。

昭和十二年十二月十五日、現役兵として、第十九師団歩兵第七十四連隊通信隊に入隊、朝鮮咸興。